The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ローマ時代の2つのプリュギア共同体 : 対比と補完
Author(s)	レヴィック, バーバラ
Citation	パブリック・ヒストリー. 2008, 5, p. 14-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66454
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Journal of History for the Public (2008) **5**, pp 14-33 ©2008 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
Two Phrygian Communities in the Roman Period: Contrast and Complementarity
Barbara Levick

ローマ時代の 2 つのプリュギア共同体

対比と補完

バーバラ・レヴィック

中尾恭三（訳）

地理的背景

本稿のテーマは、異質で相容れないようにもみえるものを統合する宗教の力である。そのためには、論述の材料が必要であろう。わたしがあつかう 2 つの共同体は、ローマ帝国の異なる属州アシアとガラティアに位置する。前者は平和的であり、後者は山岳民によってなやまされていた（図 1）。より重要なのは、双方がプリュギア地方の異なる地域に属することである。それは、アナトリア平原の西側斜面にある変化に富んだ土地である。その地形は描写するに容易ではない[(1)]。ホメロスの叙事詩にあらわれるプリュギア人は、騎乗した戦士であった。だが、かれらはリュディア人とペルシア人に従属し、ローマ時代までには柔弱な人びととみなされるようになっていた[(2)]。かれらは、インド・ヨーロッパ語をはなした。しかし、3 世紀までにこの言語は特殊化され、呪文のたぐいにもちいられていた。

歴史

2 つの共同体のうち西部にあったのが、プリュギア・エピクテトスの境界に位置したアイザニである（図 2）。それは、地母神ステウエネと息子ゼウスをまつる宗教的中核地のそばにある市場として、ひっそりと成長していった。神域は、街から 2 キロ南のちいさな丘の洞窟内にあった（図 3）[(3)]。祭儀は、おそらく前 6 世紀にまでさかのぼる[(4)]。それは、小アジアのこの地方にあった、おおくの祭儀の 1 つである。この地域は、街道からはずれているものの、穀物、ぶ

(1) 地形描写の困難については、Strabo, 12. 564、Waelkens (1986) pp. 42-4 を参照。

(2) ホメロスの叙事詩におけるプリュギア人については、*Iliad*, 2. 862; 3. 185-7; 10. 431; 16. 717-9 を参照。柔弱なプリュギア人については、Accius, *Trag.*, 569 を参照。

(3) 大地母神とゼウスは、プリュギア出土の奉納碑文において関連づけられている。Cf. K. Buresch, *Aus Lydien: epigraphsich-geographische Reisefrüchte, hrsg. von O. Ribbeck* (Leipzig, 1898), S. 156.

(4) ステウエネの洞窟については、Paus., 10. 32. 3; Naumann (1979), S. 196 を参照。 祭儀については、Mitchell, in Levick et al. (1988), pp. xxxiii-xxxv、祭儀の年代については、Rheidt (1997), S. 485 を参照。

どう酒、果物の産出、ひつじとやぎの飼育によって適度に繁栄し、アイザニは聖域をおとずれる巡礼者から恩恵をうけていた。だが、どのようにしてアイザニがその名をもつにいたったかという逸話は、注意を要する。神々が応答をせず飢饉におちいったおり、精霊へ犠牲としてささげられた食用に適さない動物である、キツネ（exis）とヤマアザラシ（ouanous）にその名は由来するのである。[5] 人びとをはぐくむ地母神が、きわめて重要であった。

土地は良質で、プリュギア・エピクテトスを防衛する目的もあって、前 3 世紀ヘレニズム王朝の王が、退役軍人を植民させようとかんがえるほどであった。[6] その王はおそらく、ビテュニアのプリュシアス 1 世（前 230/27 年―前 197 年）とペルガモンのアッタロス 1 世（前 251 年―前 197 年）であった。かれらがおこなったことは、土地をゼウスに割りあて、クレロイとよばれるそこからの割当地を退役軍人にあたえることであった。そのために、かれらは神に賃借料を支払った。共同体は、ローマ人著作家によって、ポリスとして、すなわち特定の認知可能な行政制度、施設、自治権をもち、近隣の共同体のあいだでそれなりにたかい地位にあると認識されるほど、著名となった。[7]

いつアイザニがそのようなたかい地位にまでたっしたのかは説明しづらいが、前 20 年ごろというのが妥当な推測であろう。[8] あきらかに、アイザニの土着民であるメノフィロスは、ローマ市民ではなかったものの、アシアの属州評議会書記であり、アウグストゥス帝の誕生日からはじまる属州暦を制定した。地域の保護者であるウルピウス・エウリュクレスの家系は、トラヤヌス帝治下に市民権を獲得し、かれは 153 年から 157 年のあいだ、ギリシア人の諸ポリスが形成したハドリアヌス帝の結社、パンヘレニオンの代表者であった。メネフィロス同様、かれは故郷をこえた文化的生活において、重要な役割をはたしていた。[9] 元来のアイザニ土着住民は、ペロポネソス半島のアルカディア出身、すなわち、「真の」ギリシア人である、という伝承が 2 世紀ごろに自然と流布した。[10] 建築上の遺物と同様、ここでの碑文史料の数量は、必需品を購入する以上に金銭のたくわえがあったことを示唆する。プリュギアで発見される碑文はいっぱんに、人と神との関係をつよめるための奉納品や、死去した親族の記憶を保存するための（mnemes charin）[11] 墓石が支配的である。都市の行政碑文をもつアイザニは、部分的例外である。

---

(5) アイザニの名称については、Steph. Byz., *Azanoi* を参照。

(6) 割当地については、Mitchell (1988), pp. xxxvi-xliii (texts and translations) 参照。 ペルディッカスとポレマイオスも参照せよ。碑文については、M. Wörrle, 'Neue Inschriften aus Aizanoi II: Das Problem der Ara von Aizanoi', *Chiron* 25 (1995), S. 75f を参照。

(7) ポリスと定義する古代の証言は、Paus., 10. 4. 1。要求される施設は、都市の建造物、体育競技場、アゴラ、泉である。ポリスの積極的役割については、Levick (2007) を参照。

(8) ポリスとしてのアイザニについては、Levick, in Levick et al. (1988), p. 23, *Inscriptiones Latinae Selectae*, 9463 にかんする議論を参照。

(9) アシア属州評議会書記としてのメノフィウスについては、V. Ehrenberg and A. H. M. Jones, *Documents Illustrating the Reigns of Augustus and Tiberius* (2nd edition, selected by D. L. Stockton, Oxford, 1976), no. 98、パンヘレニオンについては、Mitchell (1988), p. 178、M. ウルピウス・アプレイウス・エウリュクレスについては、Rheidt (1997), S. 485 をそれぞれ参照。

(10) アルカディア起源については、Paus., 8. 4. 3、洞窟については、10. 32. 3 をそれぞれ参照。

(11) 奉納物については、Mitchell (1993), vol. 1, p. 189 を参照。

南東のプリュギア・パロレイウス（山にほどちかいプリュギア）に、ピシディアに面したアンティオキアがあった（図 4）。人びとをそこにひきつけたのはめぐまれた雨量であり、穀物と果物が豊富であった。おそらく、前 3 世紀にセレウコス王朝が、マイアンドロス平原のマグネシアから植民者をおくりだしている。これは、山地のピシディア地方をこえて南部にまで支配を確立するためか、たんにゆたかな領域を開発するためであっただろう[(12)]。だがアイザニとちがい、アンティオキアは、アイギナ海からキリキア門とシリアへいたる重要な街道上にあった。このアンティオキアは、当初から「ポリス」だったのである。

セレウコス王朝時代の植民にくわえて、アウグストゥス帝治下にも再度植民活動がおこなわれた。しかし、それは軍隊を活用してのことであった。前 25 年、かれはアンティオキアに退役軍人を植民させた。植民者の構成は、かれ自身の軍団出身者、イタリア人、マルクス・アントニウスの軍団出身者で、おもに帝国東部からあつめられた人びとからなっていたが、すでに東方に居住していたイタリア人事業家家系出身者もいた。そのため、アンティオキアにはべつべつな 3 つの社会階層が存在した。土着民、ヘレニズム時代からのギリシア人、そしてイタリア人である。あらたな都市は、ローマの植民市であり、ローマ帝国の防波堤として要求される詳細な政治制度と建築物をともなった。それらは、支配都市をまねたものであった[(13)]。都市は、統治組織として都市評議会（ordo decurionum）をもち、政務官として 5 年任期の 2 人官（duoviri quinquennales）、按察官（aediles）、財務官（quaestores）が、聖職として神官（pontifices）と鳥占官（augures）がいた。都市市民はローマ市民でもあり、軍団につとめる資格をもった。もし財産があれば、かれらは騎士身分に属し、究極的には元老院階級に属することもあった。ローマの祭儀、とくに帝国祭儀が神官（flamines）とアウグストゥス帝にささげられた中央神殿とともに導入された（図 4、8）。

都市の南東 3.5 キロ、山脈の露出したいただきに、もう 1 つの聖域がある。建築物は、およそ前 175 年―前 125 年にまでさかのぼる。これはおそらく、ペルガモン王朝の王たちの援助で建設されたものだが、聖域の起源はそれよりもはやい（図 5）[(14)]。これは、プリュギアの月神メンにささげられたもっとも重要な聖域である。この神の起源はなぞにみちており、イラン起源やヒッタイト起源までも主張されている[(15)]。雄鶏が夜の霊をおいだし、昼を先触れするいっぽうで、メンの松かさと三日月はあきらかに不死性を象徴している（図 6）。他地方のメンの形容辞はさまざまな権能をあらわしているが、アンティオキアのメン・アスカエノスは、地母神ステウエネ同様、特定地域の守護神である。その形容辞は、アナトリアにある 2 つのアスカニ

(12) マイアンドロス平原のマグネシアからの植民者については、Strabo, 12. 577 を参照。Cf. Mitchell and Waelkens (1998), p. 6f. Labarre と Taslialan は、植民の年代をアンティオコス 1 世時代と推定している。Cf. Labarre and Taslislan (2002), p. 258.

(13) アンティオキアで退役軍人に割りあてられた土地については、Strabo, 12. 577 を参照。

(14) メンの神殿については、Mitchell and Waelkens (1998), pp. 37-90、とくにペルガモン王朝の影響については、p. 67f を参照。

(15) メンの起源については、Labarre and Taslialan (2002), p. 273 を参照。

ア湖ともっともよく関連づけられる。メンは、東地中海全域で祭儀をもっている[16]。アテナイ出土の史料によれば、参加者は日常的なたぐいの穢れからきよらかで、さらに「心がきよらかな」場合のみ、供儀と祝宴に参加することがゆるされた。祭儀は、倫理的コンテクストをもっていたのである[17]。アンティオキアでは、アウグストゥス帝時代まで神官団が膨大な数の神殿奴隷と神殿領とを管理していた。これは、小アジアでよくしられた形態である[18]。セレウコス王朝のポリスと平行して存在する、独立した神殿組織があったとみなす見解が否定されてしまったものの、それはおそらくあまりに懐疑的すぎるのであろう。ヘレニズム化された聖域は、マグネシアのアルテミス神殿にかかわる集団に属し、それはハドリアヌス帝時代、アイザニのゼウス神殿にまだ影響力をもっていたのである[19]。

居住地と政治階層

2 都市の差異は、帝政初期がもっともはっきりしている。アイザニは、地方の神の人気に依存する地域共同体であり、かなりふるくからの居住者もくわえた土着住民によって構成されていた。アンティオキアにはとおく西方のイタリアからの流入者がおり、有力な異教の神殿に隣接した都市でもあるため、二重に人為的な創造物である。しかし、両都市にはおなじ問題が提起される。土地の土着住民とはだれであるのか。双方の都市生活のなかで、ふるくから存在していた祭儀はどんな役割をになったのか。共同体の世俗的・宗教的構造は、どのようにかかわりあっていたのか。植民活動後にどのような文化・祭儀が発展したのかを定義するためには、新参者と既存エリートとのあいだの経済的・政治的関係が、決定的だったはずである。

アイザニの場合は、比較的単純である。おそらく過疎であまり耕作されていなかった土地が、ゼウスにささげられて、しかるのち農民に割りあてられ、小作料が課されていた。アイザニが「ポリス」の地位に発展したとき、このあらたな共同体がくみこまれ、アイザニ人の土地（chora）に編入された地域住民すべてが完全市民となった。このように想定すべきであろう。神殿とその公職者は、「ポリス」構造へくみこまれた。

ピシディアのアンティオキアでは、事情は異なる。軍団兵は、神殿領から没収された土地をうけとり、ローマ法がみとめる最上位の所有権をもって、その土地を所有した。かれらは、イタリア権法（ius italicum）とよばれる特権をも享受した。その法は、植民者をイタリア人と同等にあつかい、ほかの属州民とは異なり、地税を免除するものであった[20]。既存住民は、民族浄化というかたちで排除されたのかもしれない。これにかんする史料はないが、あらそいの種

(16) メン祭儀の普及については、Lane, *CMRDM* 3, pp. 1-8 参照。

(17) メン祭儀とアテナイ人の参加については、Lane, *CMRDM* 3, pp. 9-16 と Labarre and Taslialan (2002), p. 273 をそれぞれ参照。

(18) 神官団については、Strabo, 12. 577 を参照。

(19) ヘルモゲネスによるマグネシアのアルテミス・レウコピュリュエネ神殿と関連する建築物、祝宴については、Mitchell and Waelkens (1998), p. 66 と p. 83f をそれぞれ参照。

(20) イタリア権法については、Justinianus, *Digesta*, 50. 15. 8. 10。

となったであろう。あるいは、かれらはあらたな地主の小作人として居住しつづけたか、または、以前から聖域のために奴隷が耕作していた土地が、植民者に移譲されたのであろう。

都市そのものは、たやすく規模を拡大していくことができた[21]。では、土着住民の政治的権利はどのようなものだったろうか。アンティオキアでは、「ポリス」としての政治制度をたもちつづけた非ローマ人の共同体というかたちで、ローマ人のそれと並立する第 2 の共同体が存在したのであろうか。それとも、土着住民は完全市民権をあたえられ、植民市のなかにくみこまれたのであろうか[22]。後者は、大規模なローマ市民権付与を意味したであろう。これにはんして、アウグストゥス帝による広範な市民権付与をしめすほどには、ユリウスという名をもつ人物はおおくはない。妥協点として、エリートへの特別な譲与による段階的な同化と通婚が、もっとも適切な推測であろう。そして、もしこれがただしいとすれば、アイザニには存在しなかったであろう、共同体内部の公的な断裂があったことになる。完全市民権をもたない住民（incolae）が、90 年代に言及されている。しかし、かれらがどのような住民であったかは、はっきりしない[23]。書記官（grammateis）、体育競技場監督官（gymnasiarchoi）、競技主催者（agonothetae）など、ギリシア由来の公職者も、史料にあらわれる。しかし、それは 2 世紀以降である。かれらは、残存するギリシア語をはなす住民のためにはたらいたのであろう。あるいは追加要素、つまり、ギリシア文化としてローマ人にうけつがれた、よりめだった要素であったのかもしれない。これら 2 つの階層のしたに、土着プリュギア人とピシディア人がいた。新プリュギア史料が、この領域でも出土している。プリュギアの特徴である、石戸というかたちをもつ墓石が発見されている（図 13）[24]。

聖域は、土地と奴隷との管理権をうしない、神殿行政は植民市の手にうつった。フラウィウス朝時代、神殿には「神殿財務官」と呼ばれる役職があった。その職は、按察官と財務官が兼任していた[25]。植民市そのものの収入が、おおきな財源であり、祭儀は直接的・間接的歳入で収入をうみだした。あきらかに、都市はメンとの関係性を宣伝する多量のコインを発行していた（図 6）。

アイザニおよびピシディアのアンティオキアにおける、祭儀と都市の発展

では、これら 2 つの都市がうめこまれていた、地域にふかく根ざしていた祭儀の運命を、さらにくわしくみていくことにしよう。プリュギア人の宗教性は、かれらにかんする固定観念の

---

(21) おなじ場所にあった都市と植民市については、Mitchell and Waelkens (1998), p. 7 を参照。

(22) アンティオキア土着民の市民権については、Levick (1967), pp. 68-76 を参照。

(23) Spanu (2002), p. 354 は、M. McCrum and G. Woodhead (eds.), *Select Documents of the Principates of the Flavian Emperor: Including the Year of Revolution, AD68-96* (Cambridge, 1961), p. 464 について論じている。*Tribus Romana* の記述は、都市共同体内部の民族的差別をさししめしている。 Cf. B. Levick, *Anatolian Studies* 15 (1965), p. 53f.

(24) Mitchell (1981), *ANRW* 2. 7. 2, 1062.

(25) *CIL* 3, 6839.

一部であった[26]。都市よりもふるくから存在したかれらの祭儀は、人びとの定住化と耕作があきらかな地方に属し、肉体的、道徳的、政治的な防衛基盤を形成していた[27]。

アンティオキアでは、植民者の子孫はじょじょに統合してされ、メン祭儀に関心をもって、参加するようになっていったようである。おそらく、聖域にかかわる仕事は、植民者の子孫のなかで熱意ある者の手にわたった。たとえば、月神の祝日にもよおされた体育競技を創設した、C. アルブキウス・フィルムスのような人にである[28]。監督官は、すでにみずからの仕事を息子に世襲させようとしていた。競技主催者の C. ウルピウス・バエビアヌス――トラヤヌス時代に市民権を手にいれたとおもわれる――は、植民市の鳥占官でもあり、メンとデメテルの神官でもあった。神官職そのものは、植民市の一般的な公職任期中に、めったに兼任されるものではなかった。都市公職者と異なり、神官職は終身であった[29]。

植民市と聖域は、視覚的に結合されていた。近年発表された論文では、宗教的な行列の道筋という観点から、シルチェスターやウェルラミウムのような、ローマン・ブリテン都市の建築的特徴に、注意がむけられている[30]。建築様式が、宗教的行列の背景としてあったのである。これは、ロジャーズの著書からわかるように、帝国東部のエフェソスでもきわめて似かよっている[31]。わたしたちが分析対象とする都市でも、類似点をみつけることができる。アンティオキアにあった植民市と聖域とをむすぶ道の地図が、現代の研究者によって作成され、それは「聖道」と名づけられている[32]（図 7）。その道は、個々の巡礼者のためのみならず、植民市からメン・アスカエノスの聖域までを行進する、壮大な行列のための道となったであろう。神殿のそばには、競技場と祝宴用の家屋があった（図 5）[33]。およそ 1.5 キロメートルにわたって 150 もの柱群が岩にほりこまれていたことから、道は実際に神聖なものであった。そしてそれは、いくつかの場所がとくに神聖なものとされていたことを示唆する。列柱 (stelae) は、聖域から発見された個々のおおくの記念碑とおなじ形式をもっている。双方の主要な特徴は、中心部をしめる 1 つかそれ以上の三日月模様である。遺物の 64.53 パーセントには、おおくて 6 つの三日月模様がきざまれ、それは奉納者の数と一致する。かれらは、しばしば家族集団内で共同して、奉納をおこなっていたようである。三日月模様のなかには、柄をもつものがあり、それは柱の基盤にあわせるためか、土台としての役割をはたすためであったのだろう（図 9 左）。おそらく、

(26) プリュギア人の宗教性については、Apleius, *Florida*, 4 を参照。

(27) Mitchell (1993), vol. 2, p. 28.

(28) *Inscriptipones Latinae Selectae* 5070. 聖域で発見された円柱に飾られたリボン付花冠が競技の勝利者に関連している、とみなしてよいかはたしかではない。

(29) 2 世紀半ばのウルピウス・バエビアヌスは、鳥占官であり、メンとデメテルの終身神官であった。Cf. Mitchell and Waelkens (1998), p. 13. 鳥占官であり植民市のパトロンであった C. カエセンニウス・プロコロス・スタイアヌスは、メンの終身神官。ローマ騎士身分であり、神官、植民市のパトロンであった C. フラウウィウス・バエビアヌスは、メンの終身神官。*CMRDM* 1, pp. 164-6; pp. 168-74.

(30) Cleary (2005).

(31) Rogers (1991), pp. 80-125 (bibl. n. 1); cf. Rice (1983).

(32) Labarre and Taslialan (2002).

(33) Mitchell and Waelkens (1998), p. 83f.

柱は奉納物であった。碑文が、独立した記念碑にのこされている。奉納者の社会階層はひろくおよんでおり、1 人の法律家、1 人の菓子職人、上層の植民市官僚たちをふくんでいる。奉納者の 25 パーセントが、ローマ風の 3 つの名をもっている[34]。神は、奉納台との関連でも言及されており、それは血をながさない奉納物や、おそらく三日月をうけとったのであろう。だが、神の牛頭とのつながりは、通常のいけにえをも示唆している[35]。

しかし、メン祭儀についてもっともなぞめいた部分は、祭儀とむすびつけられていた tekmor である。男性であれ、女性であれ、聖域で柱を奉納した人びとのなかには、みずからを tekmoreusas（tekmor のもとでなにごとかをした者）として、ときに 1 度ならず記述したものもいる[36]。そして、アンティオキアの北に位置する山脈で発見された一連の碑文は、tekmor の賓客（Tekmoreioi Xenoi）とよばれた結社にたいする貢献を記録している[37]。かれらの碑文は、帝国祭儀とおそらくかれら自身の祝祭の存在をうらづけた。それが聖域とかかわりがあったかは、不明のままである。ホメロスの叙事詩では、tekmor は、目的か誓約を意味することばである。ホメロス賛歌では、月そのものが tekmor とよばれ、死すべき人間へのしるしとなっている[38]。祭儀に参加した者は、しるしをあたえるか、うけとるかして、おそらくその特権のために支払いをおこなったであろう。もし、しるしが物質的なものであったとすれば、それは手のひらサイズの三日月のかたちをとったとみなすのが適切であろう。問題は、奉納者のうち少数だけが、奉納をおこなったと主張したことである。

だがこれは、アンティオキアでおこなわれたと推定される、ただ 1 つの聖行列ではない。植民市の帝国祭儀があり、わかるかぎりでは、都市計画そのものが必然的に高位高官とそのほか関係する者たちが参加する行列の道筋があったことをしめす（図 4）。参加者は、かれらの田園部所領からおとずれて、西壁の三重になっている市門のすぐ外に集まったようである。門は凱旋門とよばれ[39]、その場所で発掘上あきらかとされている唯一の門である。行列は、そこから右へとすすみ、舗装された縦の大通り（decumanus maximus）をとおって丘をのぼっていった。その通りは、ティベリウスの大通り（Tiberia Platea）としてしられていたようである。通りは左へおれまがって、横の大通り（cardo maximus）までつづいている（cardo maximus は、その全体をとおしてアウグストゥス通りとよばれたのかもしれない[40]）。そこから右へまわって、プロピュロン（前 2 世紀から前 1 世紀の建造）をとおって、アウグストゥス神殿（あるいは女神ローマとアウグストゥス神殿）へとむかう。神殿はおそらく、アウグストゥス帝の生前に建

(34) 奉納者の統計については、Labarre and Tasilialan (2002), p. 280f を参照。
(35) Levick (1971).
(36) Lane, *CMRDM* 3, pp. 60-2; Labarre and Taslialan (2002), p. 275f.
(37) Mitchell (1993), vol. 1, p. 239f.
(38) *Iliad*, 13. 20; *Hom. Hym.*, 32. 13.
(39) Mitchell and Waelkens (1998), pp. 96-9, with Fig. 19b. 門の建設年代は 129 年とされている。
(40) Spanu (2002) は、もともとの行列の道順はセレウコス朝時代のものだとかんがえている。

設され[41]、そこではローマ様式の犠牲式がおこなわれていたようである（図 8）[42]。神官は、特別に建造された木製の円形闘技場で、剣闘士競技と野生獣の狩りを主催した。殺された獣は、この種の儀礼に関連がある全住民のための宴会で供された[43]。植民市は帝国祭儀の挙行によって 1 つに統合され、行列が神殿にたいする植民市の権利をくりかえし表現していた。

アンティオキアにおける公式の行列は、仮説にとどまる。アイザニでは、洞窟から都市中央部にあるゼウス神殿に、祭儀の焦点がじっさいに移行しているので、壮大な規模の行列があったことを仮定せざるをえないのである。神殿や洞窟にあった古代の神域へむかうか、あるいは、そこから出発していく巡礼者の道筋は、学術的議論のまととなっている。もともとの祭儀は、地母神ステウエネのものであった。この神は、小アジアで関連のある地母神に共通しているように、地域を守護する役割をになっていた。だが、とくに重要な発展は、ハドリアヌス帝治下にステウエネの息子ゼウスにささげられた豪壮な神殿構造としてあらわれた。もっとも建築様式はふるめかしいものであったが（図 10）[44]。このゼウスも穀物の神であった。「大地を水でひたせ。そうすれば、穀物の穂は実と花でおもたくなるだろう」という祈願があった[45]。だが、ゼウスはギリシアの神々の最高神でもあり、都市的意味あいをおびていた。ヘレニズム時代の君主は、すでに割当地からえた賃貸料をこの神に割りあてていた。ドミティアヌス帝治下に打刻された貨幣は、それほど壮麗なものではないにしても、かれが神殿のなかにいる姿をあらわしている[46]。市民的野心は、前 5 世紀のアテナイ人がいだいた野心となんらかわるところはなく、ポリスの地位への上昇によってさらにうながされた。それは、あらたな出費からあらわとなる。ながい論争のあげく、ハドリアヌス帝治下にローマ人公職者が派遣され、かつてヘレニズム王朝の退役軍人に割りあてられていた、都市近郊の土地区画の面積や所有権を解決したとき、事業のために財源が利用可能となった。賃貸料支払いをしなくなった土地所有者へのしめつけもあった[47]。あらたな神殿は、よりおおくの巡礼者をひきつけるのにくわえ、都市にとってもう 1 つの副次的効果をうみだした。神殿は、墓石の装飾に影響をあたえ、彫刻家の流派が発展したのである。流派は 3 世紀のはじめまでつづき、作品の質と量は都市の繁栄をうつしだしている。ほかの小アジア地域への輸出も、その発展をうながした（図 13）[48]。

---

(41) 神殿の奉納については、Mitchell and Waelkens (1998), p. 168 を参照（ポリュピュロン門にはラテン語でアウグストゥス帝の業績録が書き記されている）。神殿の建設年代については、*ibid.* p. 167 を参照。

(42) Tuchelt (1983), S. 517f では、アンティオキアの帝国時代の神殿は、メンにささげられ、神殿地下室は（アイザニとおなじく！）地母神にささげられた別の聖域であるとかんがえている。だが地下室の規模は最大で、縦 7.50 メートル、横 5.54 メートル、高さは 2.50 メートルしかなく、祭儀をとりおこなうことはできなかった。Cf. Mitchell and Waelkens (1998), p. 119f; p. 158f.

(43) *CIL* 3, 6810-12; W. M. Calder, 'Colonia Caesareia Anthiocheia', *JRS* 2 (1912), p. 101, no. 33. 祭儀が「2 ヶ月続いた」とは、7 月の収穫からアウグストゥス帝の誕生日である 9 月 23 日までのことであろうか。

(44) Rheidt (1997), S. 493.

(45) E. Gibson, *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 31 (1978), S. 234.

(46) 初期のゼウス神殿については、*Roman Provincial Coinage* 2. 1, p. 207, no. 1262 を参照。

(47) Mitchell, in Levick et al. (1998), pp. xxxvi-xliii.

(48) Waelkens, in Levick et al. (1998), pp. xliv-liii.

アイザニにある神殿の神像安置所の真下には、地下室がある[49]。それは、地母神信仰がおこなわれていた本来の洞窟であるとかんがえられてきた（図 11）。神殿は、1 つの発展をとげたようである。まるで地母神は、移動させられ、都市の祭儀にくみこまれ、従属させられさえもしたようにみえる。K. ライトは、いくつかの理由からこの観点をうけいれていない[50]。かれのかんがえによると、地下室にはゼウスと地母神信仰をさししめすものはなにもなく、民衆祭儀がそこで開催されていたにしてはちいさすぎ、おとずれるにも不便であるからだ。そこは倉庫か、よくても神託場であったようである。第 2 に、もともとペンカラ川土手に位置した都市中心部からつづくふるい道筋は、ゼウス神殿が建立されたときもかわることがなかったのである。それどころか、装飾門は 2 世紀おわりか 3 世紀はじめに建築され、行列の道筋は、エウリュクレスが義理の両親にたてた墓石ちかくをとおって、洞窟へつづいている（図 12）[51]。それゆえ、洞窟と神殿を直接つなぐ道筋は存在しない。川の西側にあらたな体育競技場と浴場がたてられたときも、それはふるくからの方向にしたがっていた。女神は、洞窟のなかにいながらに、都市設計のなかにふくめられ、それを支配さえしたのである、とライトは結論づける。「ローマ人のぜいたくは、アナトリア人の遺産をのりこえることに失敗した」とはライトの言葉である。

「ローマ人のぜいたく」に言及するのは、場ちがいである。わたしは折衷的なみかたをえらぶ。アイザニには、現地でのあらそいをともなったにせよ、ともなわなかったにせよ、洞窟の地母神信仰と都市のゼウス信仰、伝統的信仰と都市的信仰とのあいだに和解があった、というみかたである。あつれきがなかったわけではないのは、アイザニで発行された貨幣からうかがえる。ゼウスとくらべてキュベレは、貨幣にきざまれた象徴としては重要な神ではなかった。そして、ゼウスが子供として表現されるときは、地元の河神か平凡な雌やぎとの関連においてである[52]。キュベレとゼウスの分離は、かれが土地をあたえられ、街で最初のゼウス神殿にすえられたときにはじまっていた。

ハドリアヌス帝時代の神殿にあった地下室の面積は、ライトがいうほどにひどくせまいわけではない。それはケラ（神殿の神像安置所）とおなじだけのながさをもち、幅は 8.90 メートルあった[53]。地母神のための施設をあらたな神殿に結合させることは、賢明な判断であっただろう。かの女は、神殿内にはこびこまれたようである。おそらく、神殿と洞窟を往復さえしたかもしれない。つまり、神像が洞窟から神殿にうつされ、それからふたたびもとにもどされたのである。だが、いく世紀ものあいだ神殿であった場所が、命令によってたんに放棄されたわ

---

(49) 地下室については、Mitchell (1993) 2, fig. 5; Naumann (1979); Mitchell, in Levick et al. (1988), p. xxxf; L. Robert, *Bulletin de Correspondence hellénique* 105 (1981), pp. 331-60 を参照。

(50) 地下室の解釈については、Rheidt (1997), S. 493 を、墓地記念碑については、*ibid.*, S. 489f を参照。東側の土手でみつかった 1 世紀なかばのアルテミス神殿の構造物から推測される帝政初期の中心部については、*ibid.* S. 492 を参照。2 つの建造物間の緊張関係は継続し、それはハドリアヌスの劇場の中心軸とのちの時代にアイザニで建設された戦車競技場の方向からしめされる。それについては、*ibid.* S. 495 を参照。

(51) Naumann, *Archäologischer Anzeiger* (1982), S. 356-60.

(52) *Ibid.*, S. 92f.; Burnett et al. (1992), pp. 498-503; Burnett et al. (1999), p. 207f.

(53) 地下室の規模は、縦 24.90 メートル、横 8.90 メートルであった。Naumann (1979), S. 15f.

けではなかった。ふるい聖域にしたしんでいた巡礼者は、なおふるい道筋にそってそこへとおもむき、都市からもどってきたのである。2 世紀なかばの著作家パウサニアスは、アイザニ住民は女神がおさめていた神殿をまださししめすことができる、と主張している。

浴場と、2 世紀おわりか 3 世紀はじめに設置されたふるい道筋のうえのあたらしい装飾門の配置は、保守的感情を反映している。その道筋にそってエリートの墓所がすえられたことは、古代の聖域がまだ人びとをひきつけていたことをたしかにしめしている。だが、アイザニと洞窟をむすんだ行列の方向や性質について、はっきりとわかっているわけではない。都市中心部の東側とおなじく、行列はあらたな神殿と洞窟を組みこんでいたとすれば、それは完全な意味でアイザニにおける宗教上のアイデンティティを目にみえるものとしたであろう。

わたしたちがあつかった 2 都市は、起源と先住民によって一見すれば異なっているようにみえる。しかしかれらは、それぞれに調和させねばならない混合したアイデンティティを共有していた。プリュギア人として、ギリシア人として、アンティオキアではさらにローマ人としてのアイデンティティである。2 都市に課されたポリスとして、植民市としての地位は、双方が複雑なアイデンティティを形成し、仲介した。ほかの古代都市、とくに小アジアの都市と共通してかれらが発展させた行列は、かれらを統合させるという目的を表現した。アイザニとアンティオキアが共有したのは、この力学であった。

だが、行列はより広い意義の一端を例示するのみである。異質で、不釣合いかつ相容れないようにもみえるものを調停すること、それがあらゆる宗教の主要な機能の 1 つであろう。それは、宇宙と人間性、神の力と人間の無力、生と死、そして S. プライスの古典的研究がしめしたように、よりひくい次元では圧倒的な世俗権力と被支配者、または潜在的犠牲者とである。さらに、宗教的思考の柔軟性は、それ自身が内部にかかえる矛盾とあらそいを解決させることができた。G. ロジャーズのエフェソス研究によれば、宗教的行列は、過去の祭儀と現在の祭儀、過去の社会と現在の社会を統合していた。アンティオキアでは、宗教的行列は植民市と伝統的なプリュギアの祭儀とのあいだの関係や、植民者とかれらの神的な主人であり、植民市創設者でもある皇帝とのあいだの関係を構築した。アイザニでは、それは地域の宗教内部にある 2 つの要素（地母神の祭儀はおそらく、もういっぽうの祭儀よりふるいものであったであろう）をたしかに「ポリス」にむすびつけたのであった。

【謝辞】

「東地中海における儀礼と共同体」にかんするセミナーに招待していただいた栗原麻子准教授に、まずは感謝を述べたいとおもいます。みなさまといっしょに過ごせたことは、わたしにとっておおきな名誉とよろこびです。

図 1　小アジア西部（Mitchell 1993, vol. 1）

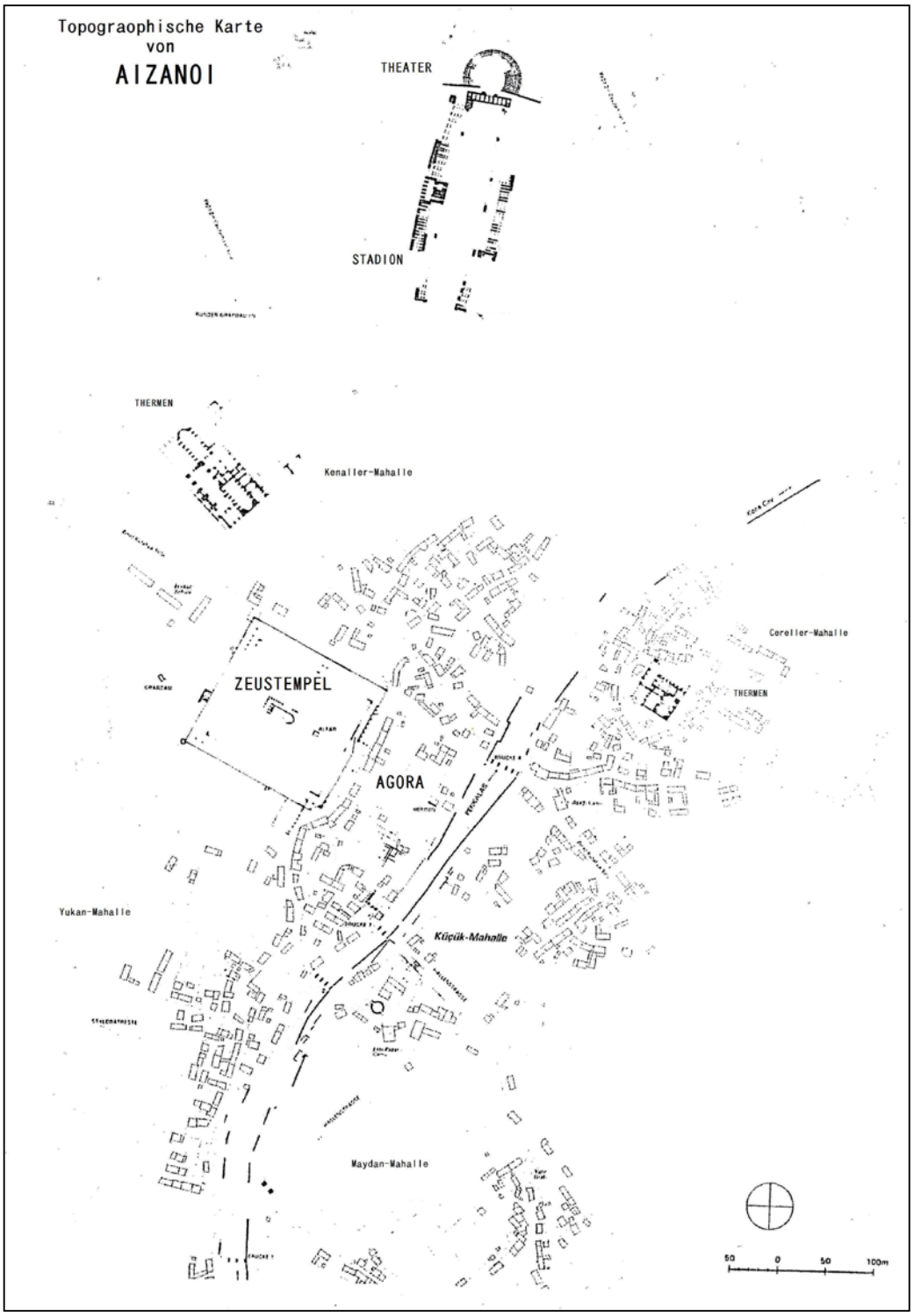

図２　アイザニ（Rheidt 1997）

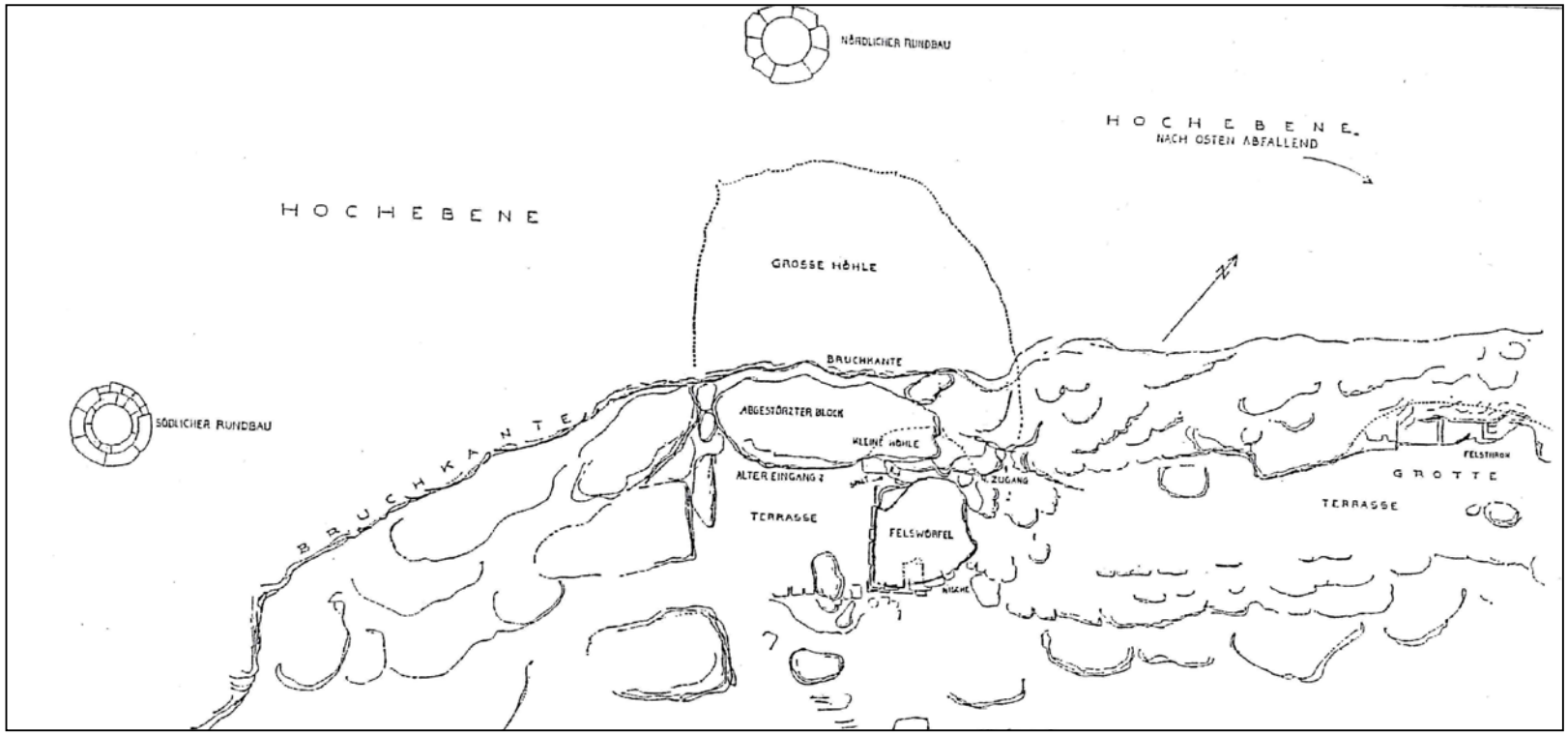

図 3　地母神ステウエネの聖域（Naumann 1967）

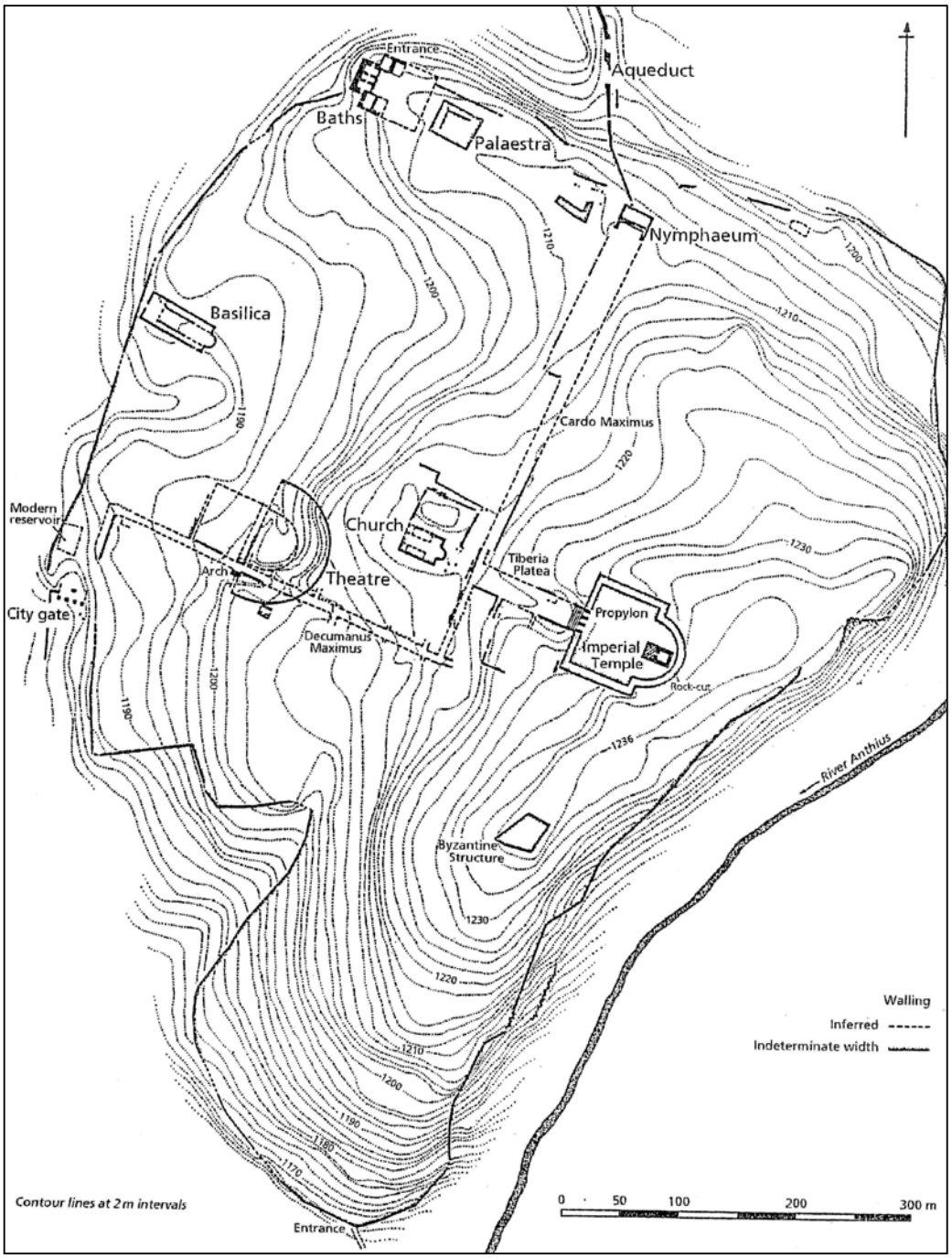

図 4　ピシディアのアンティオキア（Mitchell and Waelkens 1998）

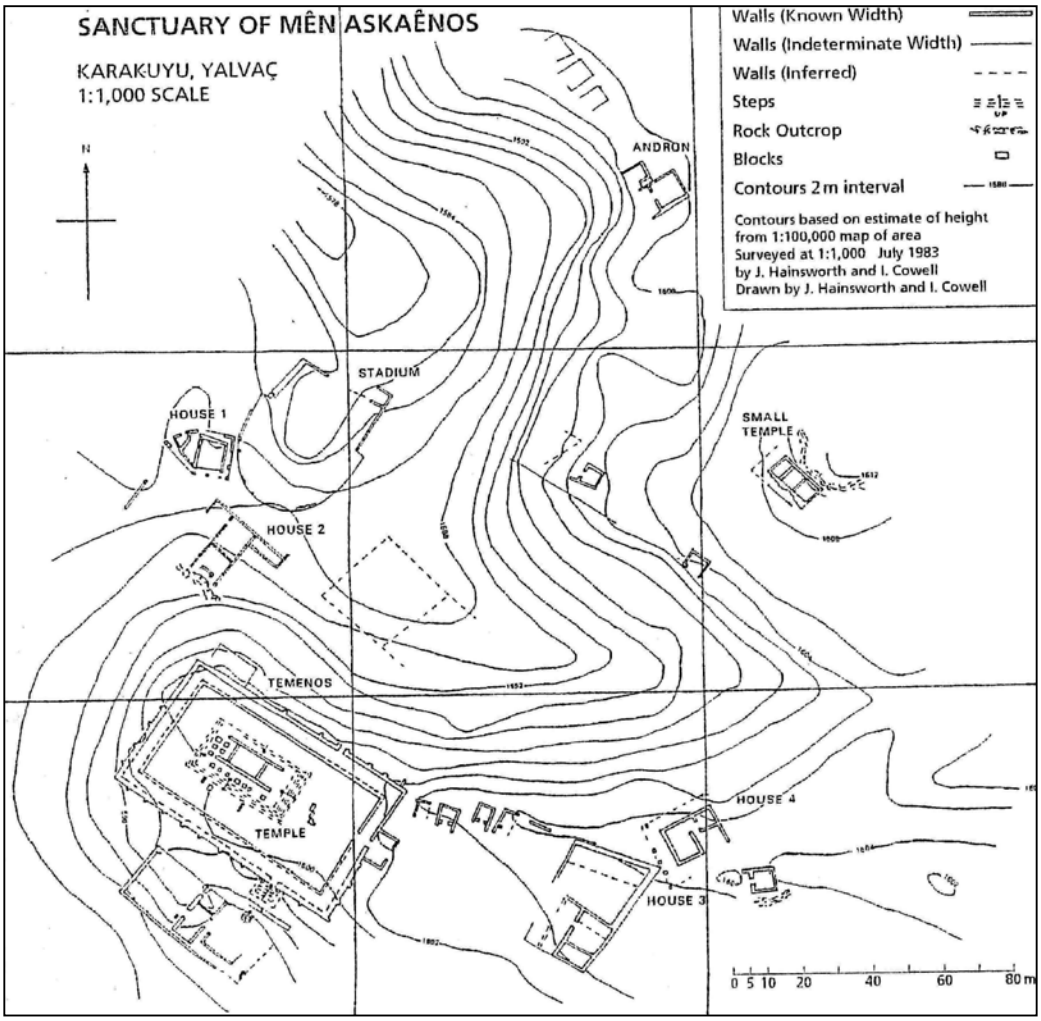

図 5　メン・アスカエノス神殿（Mitchell and Waelkens 1998）

図 6　プリュギア帽をかぶり神殿に立つメン、肩のうしろに三日月、
右足元に雄鶏（Lane, *CMRDM*, vol. 2, Pl. 36）

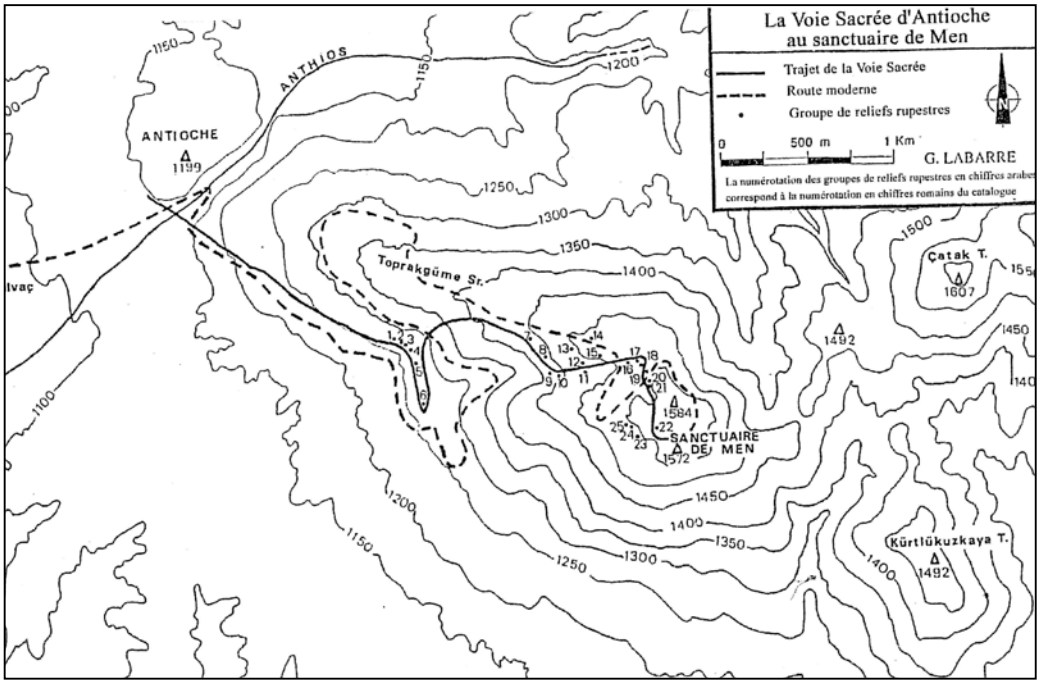

図 7　アンティオキアからメンの聖域へつづく「聖道」（Labarre and Taslialan 2002）

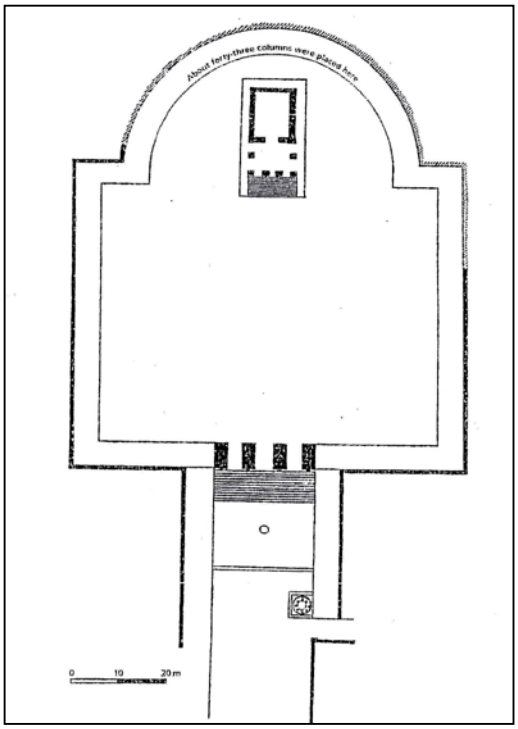

図 8　アンティオキアの皇帝神殿と
ティベリア・プラテア（Mitchell and Waelkens 1998）

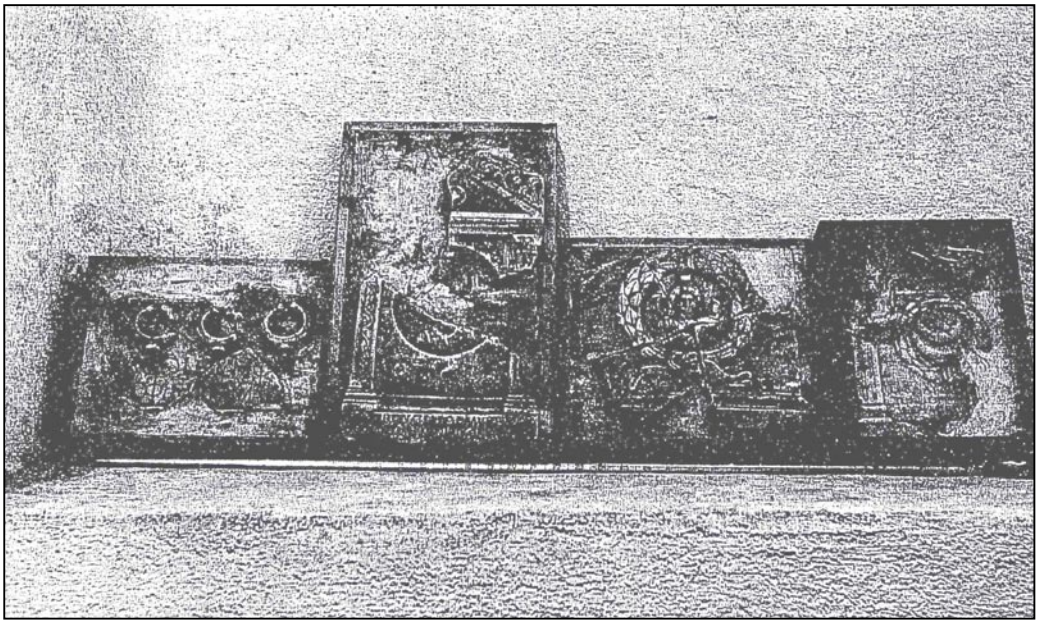

図 9　メン・アスカエノスへの奉納品（コニュア博物館所蔵、写真は著者による撮影）

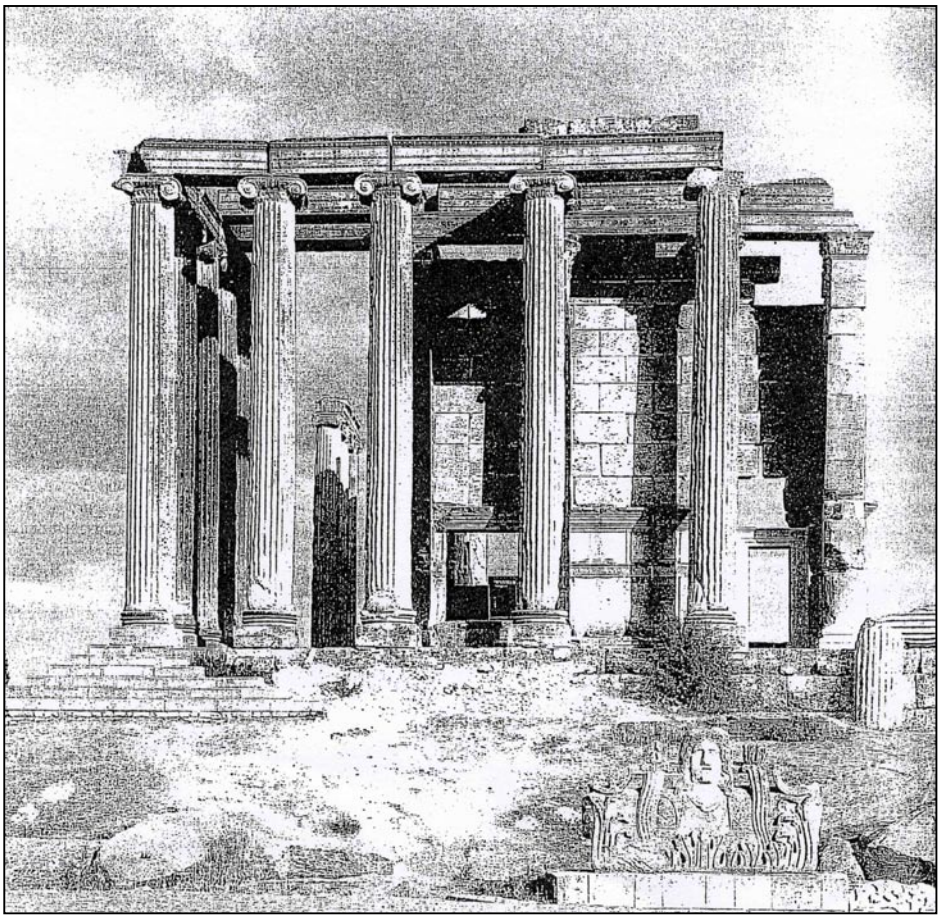

図 10　アイザニのゼウス神殿（Rheidt 1997）

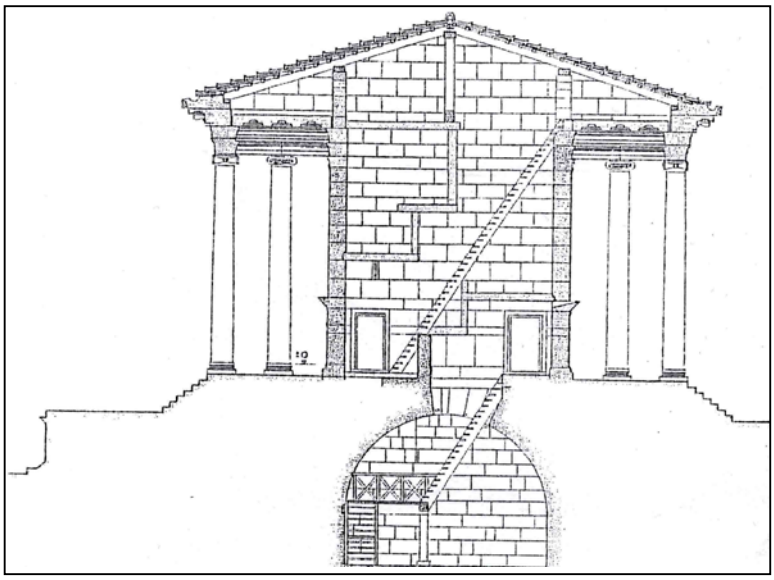

図 11　ゼウス神殿と地下室の断面図（Rheidt 1997）

図 12　2 世紀後半のアイザニ（Rheidt 1997）

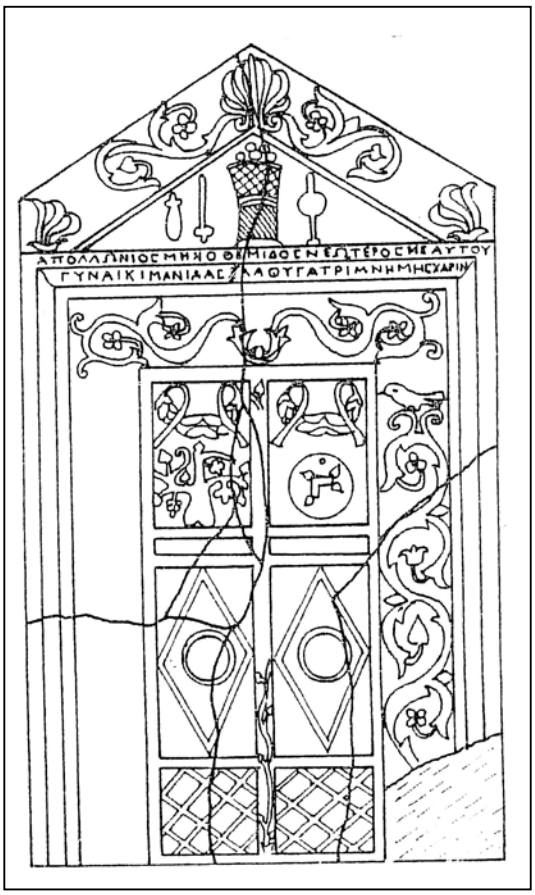

図 13　アイザニ出土、ハドリアヌスの石戸
（Levick et al., 1988, no. 313）

【訳者付記】

本論文は、日本学術振興会科学研究費基盤研究 B（「東地中海周辺域における都市共同体と儀礼」）の一環として実施されたバーバラ・レヴィック氏の講演会（2006 年 11 月 29 日、於京都大学）原稿の全訳である。

著者であるバーバラ・レヴィック氏は、1932 年生まれ。オクスフォード大学のセント・ヒューズ・カレッジで学び、1956 年から 59 年までセント・ヒルダズ・カレッジの講師を勤めた。1959 年より同カレッジのフェローに就任するとともに、University CUF Lecturer も勤める。1998 年からは名誉フェロー。主著は、*Claudius* (London, 1990)、*Vespasian* (London and New York, 1999) など、ローマ皇帝の伝記をとりあつかったものや、*Roman Colonists in Southern Asia Minor* (Oxford, 1967), *The Government of the Roman Empire* (London, 1985) など多岐にわたる。近著に *Julia Domna: Syrian Empress* (London, 2007)。共著には、R. Hawley and B. Levick (eds.), *Women in Antiquity: New Assessments* (London, 1995)、B. Levick, S. Mitchell, J. Potter et al.(eds.), *Monuments from the Aezanitis recorded by C. W. M. Cox, A. Cameron, J. Cullen, Monuments Asiae Minoris Angtiqua* 9, *Journal of Roman Studies Monographs,* no. 4 (London, 1988) など多数ある。

【参考文献】

A. Burnett, M. Amandry, et al. (eds.), *Roman Provincial Coinage. 1. From the Death of Caesar to the Death of Vitellius (44 BC-AD 69)*; *2. From Vespasian to Domitian* (London and Paris, 1992, 1999).

S. E. Cleary, 'Beating the Bounds: Ritual and the Articulation of Urban Space in Roman Britain', in M. Mac Mahon and J. Price (eds.), *Roman Working Lives and Urban Living* (Oxford, 2005), pp. 1-17.

T. Drew-Bear, 'Local Cults in Graeco-Roman Phrygia', *Greek, Roman, and Byzantine Studies* 17 (1976), pp. 247-68.

T. Drew-Bear et C. Naour, 'Divinités de Phrygie', *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt* (*ANRW*) 2. 29. 3 (1990) 1907-2040.

T. Drew-Bear, M.Taslialan, et C. Thomas (eds.), *Actes du Ier Congrès international sur Antioche de Pisidie.Collection archéologie et histoire de l'antiquité Université Lumière-Lyon,* 2, vol. 5 (Lyon-Paris, 2002).

A. Körte, 'Das Altar des Zeustempel von Aizanoi', in *Festschrift für O. Benndorf* (Vienna, 1898), pp. 210-4.

D. Krencker und M. Schede, *Das Zeustempel zu Aizanoi* (hrsg. von R. Naumann, Deutsches Arch. Inst. 1979).

A. Kryzanowska, *Monnaies colonials d'Antioche de Pisidie. Travaux du Centre d'Arch. Médit. De l'Acad. Polonaise des Sciences* (Warsaw, 1970).

G. Labarre et M. Taslialan, 'La Devotion au Dieu Men; Les reliefs rupestres de la Voie sacrée', in Drew-Bear et al. 2002, pp. 257-312.

E. N. Lane, *Corpus Monumentorum Religionis Dei Menis* (*CMRDM*). Etudes Prélim. aux rel. orient. dans l'Emp. Rom. (4 vols., Leiden, 1971-8).

B. Levick, *Roman Colonies in Southern Asia Minor* (Oxford, 1967).

B. Levick, 'The Table of Men', *Journ. Hellenic Studies* 91 (1971), pp. 80-4.

B. Levick, 'Girdled by Hills: Culture and Religion in Phrygia outside the Polis', in G. Rogers (ed.), *Regionalism in Hellenistic and Roman Asia Minor, Ausonius* (Bordeaux, 2007, forthcoming).

B. Levick, S.Mitchell, J. Potter, M. Waelkens et al. (eds.), *Monuments from the Aezanitis recorded by C. W. M. Cox, A. Cameron, and J. Cullen. Mon. Asiae Minoris Antiqua* (*MAMA*) 9. *JRS Monographs* 4 (London, 1988).

S. Mitchell, *Anatolia: Land, Men, and Gods in Asia Minor* (2 vols., Oxford, 1993).

S. Mitchell and M. Waelkens, *Pisidian Antioch: The Site and its Monuments* (Duckworth with the Classical Press of Wales, 1998).

R. Naumann, 'Das Heiligtum der Meter Steunene bei Aezani', *Istanbuler Mitteilungen* 17 (1967), S. 218-47.

R. Naumann (hrsg.), *Der Zeustempel zu Aezani nach den Ausgrabungen D.Krencker und M. Schede bearbeitet u.* (Berlin, 1979).

A. Petrie, 'Epitaphs in Phrygian Greek', in W. M. Ramsay (ed.), *Studies in the History and Art of the Eastern Provinces of the Roman Empire. Aberdeen Univ. Studs.* 20 (Aberdeen, 1906), pp. 119-36.

W. M. Ramsay, *Cities and Bishoprics of Phrygia, being a Local History of Phrygia* (2 vols., Oxford 1895-7).

K. Rheidt. 'Römischer Luxus – Anatolisches Erbe. Aizanoi in Phrygien – Entdeckung, Ausgrabung und neue Forschungsergebnisse', *Antike Welt* 28, 6 (1997), S. 479-99.

E. E. Rice, *The Grand Procession of Ptolemy Philadelphus* (Oxford, 1983).

G. M. Rogers, *The Sacred Identity of Epheos: Foundation Myths of a Roman City* (London and New York, 1991).

M. Spanu, 'Considerazioni sulle Plateae di Antiochia', in Drew-Bear et al. 2002, pp. 349-58.

R. Syme, *Anatolica* (Oxford, 2002).

K. Tuchelt, 'Bemerkungen zur Tempelbezirk von Antiochia ad Pisidiam', in *Beiträge zum Altertumkünde Kleinasiens. Festschrift für Kurt Bittel* (1983), S. 501-22.

M. Waelkens, *Die kleinasiatische Türsteine: typologisch und epigraphische Untersuchungen des kleinasiatiscn Grabreliefs mit Scheintür* (Mainz, 1986).

M. Waelkens, 'Phrygian Votives and Tombstones as Sources for the Social and Economic Life in Roman Antiquity', *Anc. Soc.* 9 (1977), pp. 277-315.